

子育て支援における母親グループの役割と機能

—「母になる」という発達ラインを中心に—

13005PCM 鷹取 眞理

I. 問題意識

1. 子育ての状況の変化と子育て支援

現代の子育ては、少子化や核家族化が進み、地域とのつながりが希薄になり、孤立化した家族状況のなかで、主に母親の負担感が増大し、自身の子どもができるまで乳児と触れ合う経験が乏しいまま親になることが増えている。また、戦後生まれの母に育てられた時代にあっては、女性の「自己実現」「自立」が叫ばれ、子育てにおける自己犠牲と個の確立との解離が進展している。親の子育てには、親自身の受けた養育体験が影響する。特に、周産期から乳幼児期にかけて、親自身が抱える葛藤の影響を受けやすく、母親が安心して子育てについて語りあう場を提供し、予防的なケアをしていくことが、母親を支え、子どもを守っていくことにつながる。

2. 「母」という新しいアイデンティの形成

女性は、出産によって再び自身の母親への同一化と分離を内的には再体験し、子どもとの間に、外的にも内的にも同一化と分離のアンビバレンスを抱えながら、個性化へと向かう。スターン (Stern, 1998) は、子どもが生まれた時点では、「母親の母—母親—赤ちゃん」からなる新たなダイナミクスが生まれるとし、母親役割のモデルとしてふさわしいかどうか吟味しながら、新しい母親アイデンティティが作られていくとしている。

3. 親支援のためのグループ・アプローチ

杉山 (2008) は、母親の抱えている課題に取り組むうえで、その背景に合わせたグループワークの必要性和虐待予防のためのネットワーク機能の重視について論じている。グループは、母子の二者関係から三者関係への広がりを目を拓く体験であり、孤立した子育ての状況においては、母親同士がお互いの悩みや課題、日頃溜めているさまざまな思いなどを共有し、悩んで

いるのは自分だけではないという安心とつながりを感じながら、仲間を作っていくことに、意義があると考えられる。

そこで、子育て支援の1つのモデルとして、次の「母になる」という3本の発達ラインを想定した。

- (1)自分の中にいる母親イメージの修復と新しい母親モデルの取り込み
- (2)自己の実現と子どもへの没頭との両働きの統合
- (3)現実の乳児の姿と自分の中の想像の乳児との不一致の解消

II. 目的

本研究の目的は、次の3点に要約される。

- ①半構造化された2つの母親グループ・ワークを取り上げ、それぞれのグループ・プロセスからグループや個人にもたらした機能と役割をみていく。
- ②その後形成された自助グループの特質と課題を検討する。
- ③これらの結果から、想定した「母になる」という3本の発達ラインを検証し、1つの子育て支援のモデルとして、母親が真に求めているものと提供すべきものを検討する。

III. 方法

研究協力者：子育て支援の情報誌からの公募で募った、子育て中の母親21名。グループI；0歳から7歳までの子どもを持つ母親10名（平均年齢34.4歳）、グループII；0歳から4歳までの子どもを持つ母親11名（平均年齢34.5歳）、ファシリテーター3名。

手続き：グループIは、X-1年10月から11月末。グループIIは、X年5月から6月までの期間に、事前面接と母親のグループワーク「Nobody's Perfectプログラム」による毎週1回、2時間のグループセッションを連続して6

回、クローズド形態（希望者のみ託児）で行った。会場はN市内の公共施設を利用した。プログラム終了から半年後に形成された自助グループにインタビューを行った。研究データは、観察記述的な事例研究法、及び、ヤーロム (Yalom, 1995) による 11 療法的因子を用いて、発言内容を分析し、各グループと個人の発言回数をグラフに表わした。

IV. 結果

1. グループ I : 自分の母親イメージの修復に取り組んだグループ

(1) グループ・プロセス : 初回から「イライラ」を口にするメンバーが多く、「育児を楽しいと思えない」「子どもを客観視できない」といった悩みが出され、その後、参加者の 1 人の発言が突破口となり、次々と自身の母親との関係が語られるようになり、親との関係の振り返りへと展開していった。出席率は 98% だった。

(2) ヤーロムの 11 療法的因子からの検討 : 総発言回数 143 回中、メンバーの問題を一緒に考える姿勢（愛他主義）や自分だけではない（普遍性）、グループの凝集性が多くみられ、メンバー同士の交流とつながり感が増した。また、他のメンバーへの支持や洞察を互いに与えあう対人学習も多く認められ、ありのままの自分を見つめなおす作業となった。

2. グループ II : 母親役割の習得と情報交換が主題となったグループ

(1) グループ・プロセス : 解決法やアドバイスがほしいという希望や、子育てと家事の両立への迷いや不安が多く出された。お互いに様子伺いの雰囲気が強く、全体に、育児や家事のこなし方、時間の使い方といった役割行動に関心が集中していた。また、メンバー 11 人中 8 人が、3 人以上の兄弟のいる家庭に育ち、親から相手にされずに寂しい養育環境が共通していたが、自身の母親との関係についての話題は回避され、夫との関係に焦点が置かれた。出席率は 86% であった。

(2) ヤーロムの 11 療法的因子からの検討 : 総発言回数 102 回中、家事や自分の時間の使い方の情報の伝達やモデリングの発言回数が多かつ

た。一方、カタルシスは 1 回にとどまり、グループの凝集性は最終セッションでようやく高まった。

V. 考察

1. グループ・プロセス

グループ I と II では、グループ・プロセスの展開が異なっていた。グループ I ではリーダーが存在し、失敗を許容する、ほどよい (good enough) な子育てを肯定する雰囲気グループ内で共有された。グループ II では、母が抱える課題を回避し、関係性を恐れて、情報交換のみに終始した。母親としての役割意識へのとらわれから展開しなかった要因として、ファシリテーションの力とグループの構造の弱さという課題が考えられた。

2. 「母になる」という 3 本の発達ライン

グループ I は、母親との関係のふり返りにより、内省的自己が賦活され、自分の中の母親イメージの修復に向かうことができ、それと併行して、想像の乳児と現実の乳児とのズレを解消し、個としての自分と母親という役割とのアンビバレンスを統合していくことが主要な取り組み課題となった。グループ II は、これらの課題に向き合う条件が整わず、3 本の発達ラインの前段階で留まることになり、母親役割を学ぶための情報交換が優先された。

グループ I では、親との関係性の整理が焦点となったことを契機として、グループ全体が母性的な機能を持ちはじめ、そうしたグループの雰囲気にふれる体験によって、母親イメージの見直しと取り込みが進行したものと思われる。グループ II では、表面的な役割行動の習得により、「よい母親」である自分を構築しようとして、母親自身の母に対する否定的感情を回避するようにして全体が流れて行き、初期においてグループの凝集性を高める要因であるカタルシスの体験が生じることなく終わった。グループ I は、「母になる」という発達ラインの初期過程を示すものと考えられた。グループ II は、この発達ラインの課題への取り組みの前に、前段階となるような母親役割を学ぶ学習の場が必要であることが示唆された。